

華愛華

(Hua Aihua)



華東師範大学 教授

華東師範大学教授、博士課程指導教官、就学前教育学科主任、教育部就学前教育専門家指導委員会に所属。

主な研究テーマは、就学前教育学、遊びの理論、幼児心理学など。その他、「0～6歳児の一体化教育」、「幼稚園での遊びカリキュラムについての研究」などの研究プロジェクトを担当。

中国就学前教育研究会副理事長、遊びと玩具の専門委員会主任、保育組織教育専門委員会委員。

主な著書に『幼児の遊び理論』（上海教育出版社）、『教え導き、育てる知恵』、『就学前教育改革のヒント』、『遊びと子どもの早期発達』（訳書）などがある。

遊びの中の学びと発達

遊びは子どもの成長過程にあらわれる独自のものであり、遊びのない幼児期は存在しないと言ってもよい。遊びと幼児期が切り離せないのは、遊びが幼児期の成長に関係があるからである。遊びという行為には発達の神秘が潜んでおり、遊びの過程には発達の原動力があるのだ。

遊びと発達には、「遊びが発達のレベルを反映し」、「遊びが発達を強化し」、「遊びが発達を促す」、といった関係がある。

では、遊びはどういったメカニズムによって子どもの発達を促しているのだろうか？成長過程にある子どもにとって、生理的・心理的なメカニズムに対して効果を発揮するとき、そのメカニズムに応じて内的ニーズが生まれる。そして個々に自発的にそれに見合った行動をとることで、そのニーズを満たすのである。子どもが集中して遊びに取り組んでいるときというのは、上記の何らかのメカニズムの発達に有意に働く。遊びの自発性から分かるように、遊びは生理的・心理的な機能を自然に働かせることがわかる。また、遊びの過程において子どものもっている潜在的な能力を活性化させ、外部環境との相互作用のなかで、自然にいろいろな経験を体得できるのである。

遊びの学習効果には、思考の柔軟性、拡散性、創造性を高めることがあげられる。遊びから生まれるこういった学習効果は、長期にわたって持続するものである。なぜなら、教えられることによって獲得する特定の知識や技能に比べて、遊びによって子どもが獲得するものは知恵と能力であり、そこから未来への適応力を得られるからである。